

入手可能な素材と機会を用いた無理のない

学校評価という可能性

石田健一*1

*1 東京大学

An attempt to expand the diversity of school evaluation in a way that people use presently available materials and take opportunities

*1 University of Tokyo

School evaluation under the current guideline by Ministry of Education and Science has been introduced and implemented in all public schools in the area of primary and secondary education. I had a unique opportunity to actively participate school-evaluation project carried out at the middle school in the northern Tama, Tokyo as one of core evaluators. This evaluation is unique because it focused on the experiential learning rather than on the score of the examination results by students. In this report I will explain the result of the evaluation, discussing pros and cons of the approach and highlighting further issues of sustainable and user-friendly school evaluation.

キーワード: 学校評価、体験学習

1. はじめに

学校評価は努力目標として学校評価ガイドラインに定められた行為であり、全国の4万校でその実施が繰り返されている。

学校評価士の有志が集まり、平成27年度に北多摩地区（東京都）に位置する中学校で実施された学校評価の特徴は、以下である。

- テストの成績によらない学校評価
- 学校評価の「見える化」を目指す
- 体験学習を評価する

報告者は評価のコアメンバーとして、評価計画の策定から実施、評価終了後の振り返りまで全てのプロセスに深く関与した。

本報告では評価の結果を交えながら、入手可能な素材と機会を用いた評価の試みとその可能性について論じるものである。

2. 評価の方法

2.1 評価対象の活動について

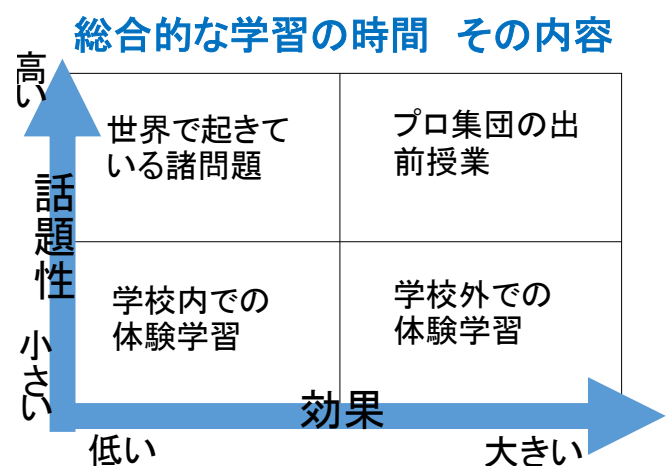


図1 総合的な学習の項目の比較検討

図1に示したように、体験学習は他の諸課題と比較して話題性はそれほど高くないが、本人そして身近な人たちの生活に直結することでの直接的な体験を得ることが多いため、生徒にとっては効果が高いと推定されるものである。

学校外での体験学習を評価の対象事業と定め、当該校で実施されている多数の体験学習プログラムから都内巡り（2年生対象、5月実施）と農業体験（2年生対象、9月実施）を選定した。

選定の理由は以下の通り。

- 学校圏を抜けた探究型の活動
- 暮らしに欠かせない「農業」の現地体験を行う実践型の活動である
- 学力テストでは測れない効果の評価への期待
- 評価素材の入手・利用のしやすさ（作文）
- 真ん中の学年であること

2.2 評価方法

評価の方法と対象者を表1にまとめた。

表1 評価の方法と対象者

都内巡り	農業体験
作文分析（対象：生徒）	体験日誌分析（対象：生徒）
（個別）インタビュー（対象：生徒数名）	フォーカスグループ・ディスカッション（対象：連絡協議会委員）
グループ・インタビュー（対象：生徒数名）	

・作文分析：都内巡り実施後の作文、農業体験日誌の内容をコーディング（分析指標）を用いて読み解いた。全数調査。

・生徒インタビュー：都内巡りの作文を解読することで、その考え方や感じ方に際立った特徴がある生徒を個別にまたは数名まとめてインタビューを行い、彼らが何に感心しどのような変化がもたらされたかを読み取ろうと試みた。

・フォーカスグループ・ディスカッション：作文と日誌では読み取れない情報の収集を試みた。保護者のコメントを深く知ることは農業体験の評価素材になりえると考え、当該校の連絡協議会委員（4名）が委員

会開催のため学校に集合した機会を利用し FGD の実施を行った。

3. 評価結果

3.1 都内巡り

3.1.1 分析に用いた指標

7月に教員対象のワークショップ（教員研修、約1時間）を実施し、リベラルアーツの活動（清瀬第五中学校、2015）の評価に際して、どのような基準や指標または視点が望ましいかということ学年毎に議論してもらった。議論されて浮かび上がってきた指標を都内巡りの作文を評価する際の基本的な指標案と定めた。

続けて評価チーム内で指標策定の会議を行い、考え抜く力「前に踏み出す力」「チームで働く力」（という3つの「力」に対し、それぞれ3種類の指標（視点）を構成した（表2）。

表2 都内巡りの作文分析に用いた指標

考え抜く力	前に踏み出す力	チームで働く力
目的を考えながら活動している	新しい知識を身に着けている	各自がリーダーの役割を理解し、活動への見通しを持っている
困難に直面したときに試行錯誤しながら解決方法を探っている	ルールやマナーの大切さに気付き、それに基づいて活動している	他のメンバーと協力して活動している
今後の自分に必要な事柄について意識している	不明な点や疑問などについて調べたり尋ねたりしている	各自が責任をもって行動している

3.1.1 分析結果

作文分析で抽出された項目の総数は340個であり、主な結果は以下である。

- ・活動で得られた経験から結論（今後の活動）に結び付けがちな傾向がみられる。
- ・活動を通じて多くの事柄に関心を示し新しい知識を見つけている。
- ・見つけた知識を基に更に新しい知識の獲得にむけて踏み出す意識や行動は顕在化してない傾向がある。
- ・班行動ではメンバーと意識して協力しようとしており、班活動全体に目を向け、一人一人の役割を意識することにもバランスよく関心を向けている。

同時に比較のため社会人基礎力の指標（経済産業省

ホームページより)を用いて都内巡りの作文分析を行ったところ、課題発見力、実行力、計画力、状況把握力の4要素が抽出記述の78%を占めており、想像力、主体性、働きかけ、発信力、傾聴力、柔軟性、起立性、ストレスコントロール力の8要素の抽出は低い数字にとどまった。

3.2 農業体験

3.2.1 分析に用いた指標

都内巡りの作文を分析する際に用いた9つの観点を念頭に置き、農業日誌の記述、学校便りから読み取れた/見えたことを指標化した。

考え抜く力：関心を持って体験し、農家から話を聞いている、関心を持った体験や話をまとめて、感想を持っている、まとめた感想をもとに、自分なりに関心を発展させて考えている。

前に踏み出す力：体験を踏まえて、今後の自分の行動について希望や意思を表明している、保護者が生徒の行動や発言の変化に気付いている

3.2.2 分析結果

・考え抜く力については指標により記述数の増減が激しいがいずれもより絞り込まれた内容に自分なりの関心を深め発展させている。

・全体の7割以上の生徒が体験から自分なりの考えを発展させており、それは記述量の多少に関わらない。

・全体の7割の生徒が、体験を終えた後の自分の行動について記述を行い、帰宅後の言動に実際の変化が見て取れる。

・日誌に記述がない場合でも保護者の目からは体験後の生徒の行動変容が認められる。

3.3 フォーカス・グループ・ディスカッション (FGD)

3.3.1 方法

FGDの実施には評価中間報告の協議会の機会を利用し、4名の協議会委員が参加した。テーマは農業体験、並びに、関係者評価についてであった。

3.3.2 農業体験

農業体験への評価：高く評価する。普段の生活とは異なる環境で長時間にわたり何もかも初めてであること(農家、農作業)に直面しながら学んでいること、が主な理由であり、今後も継続して欲しいかとの問い

かけには一斉に「もちろん」との声が上がった。

農業体験を保護者グループがパトロールすること：保護者が中心となって生徒の農作業活動を見て回る活動が実施されていたが、五中の農業体験が地域にしっかりと根付いていることがよくわかった。またパトロールそのものが地域での評判を直接に聞き取る・拾うという情報収集における適切な手段として機能していることも判った。

農業体験の改善について：農業体験の効果を参加者全員が確認しつつ、例えば、種付け作業を通じて普段は大きく成長し成長したセロリしか見ていない生徒がもとは小さな種であることを肌で感じる事ができた。そのため、種付けから収穫までの段階を参加生徒全員に体験させたい。そのためには農家同士の融通を含む体験プログラムの見直しを希望したい。

3.3.3 その他

学校の評価について：保護者が学校の評価に期待することは、子供たちが楽しく学校で過ごしているか、心も体も健やかに成長しているか、ということであり、それら2点を評価したい、評価で見たい。

3.4 学習のフィードバックを目指して

校外学習		
目標		振り返りの項目
自分の仕事に責任		内容
積極的に行動	←→	場所
マナーを守る		時期
修学旅行につなげる		きまり
etc.		大学見学について
		その他
(目標と項目：平成27年度リベラルアーツ実施要項より)		

表3 都内巡りににおける目標設定と振り返りの項目

作文の評価分析を行うことで、評価メンバー間において、それぞれの体験学習において目標を設定すること、目標の到達度合いを測定すること、生徒へのフィードバックを適切に行うこと、等の課題における現状で先ず何から手を付けていくべきか、ということが主たる議論の一つとなった。

その一つの表れとして、体験学習において目標設定

と学習実施後の返りを有効に関連付けることを念頭に、その後の評価活動を進め（表3）た結果、当該校の教員を対象として、体験学習目標の設定と作文等のハードエビデンスを通した振り返りと生徒への還元指導を行う一助となることを目指した研修（2016年1月）を実施できた。

（注：学年主任へのインタビューから、平成27年度は種々の行事の重なり等の理由で都内巡り活動の目標を生徒に徹底させる時間が確保できなかった、平成26年度はその時間が確保できて都内巡りに出かける前に生徒には活動の目標が徹底されていた、ということが判った。そのため、平成26年度の作文資料の入手を試みたが既に作文自体が生徒の手元に戻されており、比較検討を行うことができなかった。翌年度の評価における課題である。）

3.5 ゴールフリー評価

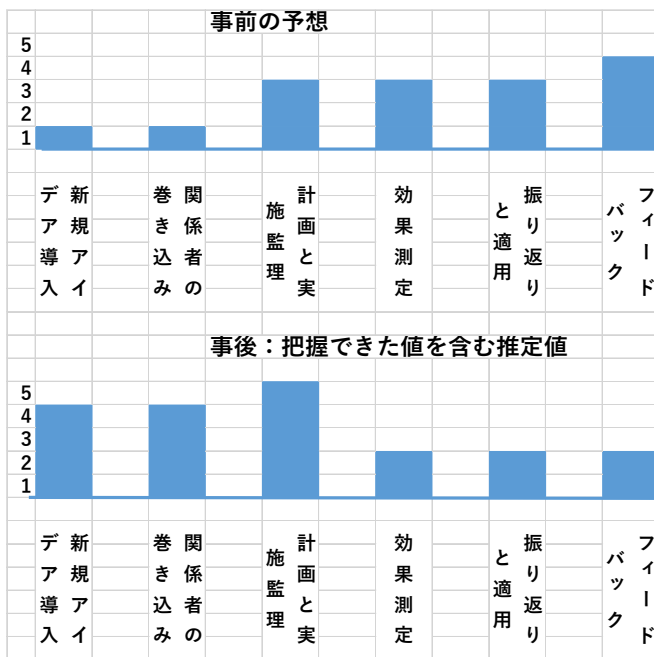


図2 実施プロセスの事前予想と事後の評価

予備的な分析にとどまるが、体験学習の評価を行う前には、それぞれの学習実施プロセス（計画策定、実施、効果測定、振り返り、生徒へのフィードバック、等）が実直に実施されているものであろう、と事前予測をしていた（図2、上方のグラフで表現）。

学校訪問、教員へのインタビュー、校長へのインタビュー等を通じて、学習効果を高めるアイデアの導入

や保護者や農業団体といった地域の関係者の適切な巻き込み、実施の計画づくりと詳細な実施監理は当初の予想を超えて着実に行われていたことを知った。

一方で、効果測定や振り返り、生徒へのフィードバックに課題が残されているようである（それゆえ、上記の研修が実施された）（図2、下方のグラフで表現）。

4. 評価のまとめ

4.1 評価結果について

2つの体験学習の取り組みを評価することで、生徒の成長の一端が具体的に確認された。

都内巡りと農業体験の評価結果を比較することで、農業体験のほうにより一層の狙いと成果が出ていることが理解される。

この違いには、作文または日誌で記述する課題が異なること、取り組み内容の異なりからもたらされるインパクトの差、生徒が取り組みを経ることにより変化していくこと、などがその理由として考えられる。

作文、日誌等の記録分析に、インタビュー（個別、グループ、FGD）を組み合わせた評価により、体験学習をより構造的にかつ多角的に評価することが可能であることが判った。

当該校においては教職員、保護者、地域が連携を図って生徒に豊かな体験学習の場を用意しており、そのことが生徒の変容や好ましい成果を引き出すことにかかなりの程度強く関連していることが示唆される。

そのような背景のもとでは、今回の評価で用いた評価手法はその特長—取り組みやすい方法であること、継続して実施できるように軽量化してあること—を十分に生かし続けていけるのではないだろうか。

4.2 今後の課題

- 生徒の好ましい変容について学年を通じて共有化の試み。
- 目標設定、成果、振り返りを意識した取り組みに継続して取り組むこと。
- 評価の対象とした2つの体験学習では詳細な実施計画が作成実行され、保護者などの巻き込みも十分なものと判断される。それらの取り組みの効果をより高めていくために、体験学習毎の目標と成果（生徒の変容）を結びつける

仕組みが明確化されてその測定と振り返りが着実に実行されていくことが望ましい。

- 当該校が実施するリベラルアーツの取り組み全般を検証していくこと。

5. 無理無駄のない学校評価を目指して

今年度も引き続き当該校において学校評価を継続する予定である。そのため、昨年度の評価結果を参照しながら今後目指すべき方向性について考察する。

5.1 評価手法と担い手

使用した評価の方法を一覧として整理した（表4）。今回の評価で用いた評価手法の特徴は、簡便でも評価結果を検証しやすい、必要な情報を集めやすい方法となっていることである。

評価の担い手を外部者（第三者）に長く依存するのではなく、簡便かつ簡単な評価の方法を適用することによって、徐々に内部主導に、つまり教員および職員を主体とした学校のスタッフの手で、さらには、直接の関係者でもある保護者にその権限を委譲・移行していくことなども中長期的な狙いに含めて良いのではないだろうか。

表4 評価作業、目的、方法、担い手

作業	目的、手段	評価方法	担い手	これからの担い手
" 拾う、見つける "	指標	作文分析	評価者	教員、評価者
" 教える "	作文の記述	作文分析	評価者	教員、評価者
" 声を聴く "	インタビュー	インタビュー（3種類）	評価者	評価者
" 比べる "	異なる指標	作文分析	評価者	教員、評価者
" 時の流れに置いてみる "	計画、実施、振り返り、学び	教員研修（1月）	教員&評価者	教員

5.2 学校評価—その方法を比較する

現在、わが国で用いられる機会が多い評価方法（表5、左）は、取り組み目標（アウトプットの指標）と達成目標（アウトカムの指標）を設定し評価するやり方である。一覧性に富んでおり、指標の設定が適切に行われれば、導入コストは安く、指標により評価における一定の質は保たれる。

一方、この方法では指標設定にかかる困難さが解消

できず、定型化した作業の中から生徒のインパクトや変容を測定し活かしていくことが容易ではない。

今回試行した多様で簡便な方法を用いることで、体験学習毎の目標の達成度を測定することや予期または想定していなかったプラス面/マイナス面の評価（ゴールフリー評価）が実施できる可能性があるように思える（図2、表5）。

表5 評価の方法比較

<p>規格化 standardization</p> <p>自己評価表(教師、生徒) 関係者評価表(保護者)</p> <p>指標設定 低コスト 質が一定 導入・実施が楽</p>	<p>多様化 diversification</p> <p>作文、日誌分析 関係者の声を聴く</p> <p>PDCAと実施構造 高コスト 質は高い 実施導入に難あり?</p>
---	--

（実施校によって学校評価に実際に用いられている方法の呼び名は異なるものと思われる。ここでの名称は便宜的なものであることに注意していただきたい）

評価の方法を多様化させることで、事業の振り返りや生徒へのフィードバックに役立てることができ、多様なステークホルダー（生徒、保護者）の声を拾うことが具体的に可能となる強さ（robust）を得たように思う。

他方で作文分析の手間などのコスト（技術ではなく時間のコスト）は高い。受益者を含めて学校取をとり巻く環境の変化を判断しながら評価を進めかつ評価計画を柔軟なものとして保つという創発的な実施が必要となろう。

そのためには、適切な評価手法の議論を継続するとともに、生徒の成長を支える教員の業務、校長による学校運営に役立てることができる評価の実施体制づくりが欠かせないものと思われる。

5.3 学校評価はどこを目指すべきか？

図3は評価結果から想定される正の便益の流れをロジックモデルに落としてみたものである。ここでは、評価の取り組みによって期待されるのは主にアウトプ

ットとアウトカムである。そこに重点が置かれている。

効果の段階	産出物/問いかけ	教員による評価	
output	(作文分析結果)	良い	予想を裏付け
↓			
outcome	(使えそうか?)	おそらく	取り組みたい
↓			
impact	(生徒への効果は?)	can't se yet	きっとある
	(教員への効果は?)	don't know yet.	高めていきたい

*教員による評価：アンケート、口頭での確認

図3 効果のロジックモデル

一方、学校という組織における直接の受益者（教職員、管理職、生徒）の関心事は何であろうか。評価を実施することでご利益を感じ取れば評価も定着するとはよく言われるたとえであるが、それらのご利益はインパクト（効果）の領域に集中しているのではないだろうが（図4）。

効果の段階	産出物/問いかけ	方向	
output	(作文分析結果)	良い	予想を裏付け
↓			
outcome	(使えそうか?)	おそらく	取り組みたい
↓			
impact	(生徒への効果は?)	作文が判る、楽しさ、喜び	
	(教員への効果は?)	作業が楽になる 生徒の理解が進む 教職が楽しくなる	

図4 受益者の効果を重視したロジックモデル

評価の実施だけで学校の改善が一夜にして成し遂げられるわけではないが、評価の実施にあたり受益者側の抜け落ちているニーズをとらえ、学校という組織の教育現場を担う教員と最終受益者である生徒への効果が“見える”学校評価を目指していくこと。そのことが学校評価士をはじめとする学校評価に関わるものの責務ではないだろうかと思う次第である。筆者は今後その方向で学校評価の実践と研究を進めていきたいと願っている。

謝辞

第三者評価の実施を受け入れていただきました清瀬第五中学校の小池雄志郎校長、同校教職員の皆さん、インタビューに応じていただいた同校の生徒さん並びに同校学校運営連絡協議会委員の皆さんにお礼申し上

げます。

評価チームメンバー（石井徹弥、石田楓軒、石田洋子、伊藤美保、大河原尚、小澤伊久美、西村昭彦）とは共に評価を進め議論をしていく中でたくさんのごことを教わりました。評価チームの監修者（小倉博義、橋本明彦）には評価チームの作業進行を見守っていただきました。併せて感謝感謝申し上げます。

参考文献

- (1) 平成27年度清瀬第五中学校:特色ある学校づくり事業の実施に関わる資料、清瀬第五中学校ホームページ、<http://www.kiyose.ed.jp/k019/>（2016年4月11日確認）
- (2) 経済産業省：社会人基礎力ホームページ、<http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/>（2016年4月11日確認）
- (3) 瀬第五中学校評価チーム：清瀬市立清瀬第五中学校第三者評価報告書、pp28（2016）